

**社会的インパクト評価イニシアチブ**  
**第7回全体会合**  
**議事録**

日時：2018年6月12日（火） 14時～16時

参加者：イニシアチブメンバー（運営会員・賛同会員含め）約60団体

<議事>

- 1.初参加者紹介
- 2.各ワーキンググループ（WG）の2017年度の事業報告と2018年度事業計画説明
- 3.志向原則の説明と意見交換
- 4.名称変更とインパクトマネジメントフレームワーク、ガイドライン説明と意見交換
5. Social Impact Day 2018 について

<内容>

**1.初参加者紹介**

以下、初参加者の皆さまよりご挨拶をいただく。

三井住友銀行 山北様

一般社団法人ユニバーサル志縁センター 小山田様

株式会社 エル・ティー・エス/SVP 東京 日野浦様

三菱総合研究所 浜岡様

博報児童教育振興会 武井様、櫻井様

笹川平和財団 アジア女性インパクトファンド 広瀬様

**2.各ワーキンググループ（WG）の2017年度の事業報告と2018年度事業計画説明**

【全体会合】日本ファンドレイジング協会 鴨崎氏より

2018年6月現在、151団体・個人が加盟。2017年1月に発表した2020年VISIONについての概説。各WGがこのロードマップの実現に向けて事業を行っており、本日は各WGより報告を行う。

【WG1:社会的インパクト志向原則】日本ファンドレイジング協会 鴨崎氏より

成果と達成状況について説明。2017年度目標が社会的インパクト志向原則の作成であり、2017年度末までに社会的インパクト志向原則の完成。今後は、普及啓発活動を他のWGと一緒にやっていく。

【WG7:アウトカム・指標作成】日本ファンドレイジング協会 鴨崎氏より

GSG 社会的インパクト投資タスクフォース国内諮問委員会の取り組みとして、社会的インパクト評価ツールセットを作成している。ツールセットは①ロジックモデル（何を測るか）、②指標（何で測るか）、③測定方法（どうデータを集めるか）を含んだ内容になっている。2017年度は介護予防、防災、子育て支援の3分野のツールセット作成に着手し、6月末までにSIMIウェブサイト上で公表予定。2018年度は公募でテーマや開発協力者を募集し、4分野を選定する。候補はヘルスケア、メンタルヘルス、障害者福祉、ソーシャルキャピタル、アドボカシー、森林・海洋保全などがあがっており、Impact Day 2018までに絞り込んでいく予定である。

【WG2：資金提供者ネットワーク】日本財団 藤田氏より

WGとして目指すことは、資金提供者にとっての「インパクト志向」のあり方の定義や「インパクト志向」に向けたアクションの検討・実施であり、新生企業投資、KIBOW、JVPF、トヨタ財団、SVPの計5件の事案共有を行った。今後は、助成金、インパクト投資、ベンチャーフィランソロピーの3つの領域で、どんなことを行っているのかを事例集として共有する。また、資金提供者における社会的インパクト・マネジメントの枠組みを事例集でも提示していく。事例集はSocial Impact Day2018のときにリリース予定。

意見聴取：

資金提供者の方に意見を求めたい。今後、事例集をつくるが、これが実際実用的なものになるかどうか、またどのような情報があったらよいか、などを伺いたい。

- 内部での回し方(M&Eとか、内部のマネジメント体制)等についても情報がある良い。
- すでに運営しているので、運用改善とか項目追加に遣わしてもらおうと思う。どのあたりまで使えば認定とかあるのか教えてほしい。  
→WGの中ではあまり認定というのは考えていないが、一般化していくなかで、マネジメントに必要な項目を入れていきたい。  
→「これがインパクトファンドだ」というような“言ったもの勝ち”という風潮がある中で、ちゃんと社会的インパクト評価のスタンダードや原則に沿ってやっているということがチェックできたり、可視化できたりするために認定というようなものがあった方がいいのではないかと思う。
- 最終的にはインパクトの最大化ということで、資金提供者が協働できるような形を目指すとする、関心が類似している分野について、どのような形で助成に関する判断基準を定めることができるのかなどを検討できるようになると良い。
- 非営利組織へ応用だけでなく、営利組織への適応ということが気になるが、そのあたりはどのように考えているのか。  
→新生企業投資さんは営利企業であり、リターンを犠牲にすることなく社会的インパ

クトを起こそうとしているので、社会的インパクト評価を資金提供プロセス自体は営利でも非営利でもできるのではないかと考えられる。一方、お金の出し方として VC や PE は投資先支援のという意味で組み込みやすいが、融資のお金の出し方のときにどう評価するかが WG でも議論になっている。オブザーバーで政策金融公庫の方に来ていただいたが、融資件数のみでも数万件あるものなので、入り口で外形的な基準で選んでも、モニタリングまで追うのが難しいという意見がある。

- 追加情報として、同じような議論を UBS もしているようだが、シリコンバレー系大企業とデータのシェア等をしている。ビッグデータ活用のインパクト評価とかがよいのではないかと思うが、そのような分科会は存在するのか？  
→テクノロジー系を巻き込んだ委員会は今のところないが、今後検討。

#### 【WG5：人材育成】 トヨタ財団 加藤氏より

2020VISION では全国で 1,000 名基礎研修終了し、100 名が実践研修を終了するというもの。2017 年は人材育成に必要なものの整理を行った。その中で、現在社会的インパクト評価に関連する研修を行っている団体の調査を行い、その結果わかったこととしては、横断的に社会的インパクト評価・マネジメントにつながる研修がなく、今後どのような要素が必要になるかを考えていく必要を感じている。その結果、ロードマップの変更を提案したいと考えており、カリキュラムや教材開発を 2018 年に取り組みこととする。WG として研修自体を企画するというよりは、WG で考え出した必要要素をカリキュラム案を他の評価研修実施団体と共有して、人材育成を行っていく。

#### 質疑・意見：

- 人材育成 WG が提示した評価の研修はすでに行われている研修なのか？そうであれば、琉球大学も昨年社会的インパクト評価の研修を行っているので、入れてほしい。  
→可能な範囲に取れる情報を得たもので、網羅的なものには決まっていなくて、この表に載っているものがすべてではない。今後リストに組み込ませていただく。

#### 【WG8：事例蓄積】 ケイスリー 落合氏より

2017 年度は社会的インパクト評価 100 事例の公開を目指していただが、最終的に 116 事例が集まった。しかし、予算等の問題により SIMI のウェブサイト上での公開にいたっておらず、現在は Web にある既存の事例が 17 件、SIMI の手元で管理している事例が 89 件とその他必要情報記入待ちの事例が 10 件という状況になっている。公開に向けての用件は整理済みであるが、現在はロジックモデルのみの案件が 69 件ほど。今後は志向原則やガイドラインを踏まえ、蓄積した事例の見直し・整理の必要性を感じている。また、事例数を増やすためには、公開のインセンティブ設計が必要だと認識している。(例：SIMI アワード(案)など)

質疑・意見：

- 活用のための論点についてもう少し教えてほしい  
→プロセスベースできった場合、この事例がどう活用されるかというところまでやっている。「やっていないけどやりたいと思うのか、課題があってこの辞令を活用したいとおもうか、調べようと思うか」などについてプロセスごとに切って考えたときに、それに対してどのような情報があったら利用する人が、これを活用したといえるのかという形で整理している。評価の質を高めたいと思ったときに、意見交換会、ピアレビューのものを現在想定はしているが、マネジメントまで落とし込んで具体的に検討するというところまでには至っていない。

【WG4：社会的認知】マカイラ 金子氏より

2017年度は空気感の情勢を目的に、社会的インパクト評価を活用するメリットの可視化、イベント・講演など社会的インパクト評価の認知を促進する場の創出、マスメディア、ソーシャルメディアを通じた発信を行った。2018年度は先ほどWG1でも発表があったように、社会的インパクト志向原則WGとも参加いただきながら、事業者・資金提供者・中間組織等が志向原則をはじめ、社会的インパクト評価、マネジメントを活用するメリットなどを発信していく。また、事業者への発信活動支援を行い、これから事業に取り組む層や、一般の人の認知を高めるような同心円状に認知が広がるように仕掛けていく。

### 3. 志向原則の説明と意見交換 日本ファンドレイジング協会 鴨崎氏より

社会的インパクト志向原則について説明。社会的インパクト志向は

- 社会的インパクトを重視した事業開発・改善に取り組む
- 多様な主体で協同して取り組む
- 事業モデルを普及する

であり、この原則に共感していただく方に署名をしてもらいたいと考えている。署名についてはいろいろな議論の背景があるが、強制するのではなく、意思表示と考えてもらえたらと考える。違反行為はSIMI運営メンバーで協議の上、登録抹消というような運用をする。

質疑・意見：

- 署名団体に対して、年1回のヒアリングをすると書いてあるが、このようなことが事例蓄積とWGでとりたい情報等と繋がって行くのか。また署名した団体のロゴが、ウェブに掲載されるのはよいと思う。
- 今現在賛同と運営メンバーがいるが、署名すると運営になるのか？  
→基本は運営メンバーとして入っていただき、ロードマップ上は1,000団体目指すことになっているので、これは目指して行きたいと思う。

- 原則の定義の中に基本的“きまり”とあるが、ちょっと表現が厳しいので、“方針”くらいがいいのではないか。またインパクト志向のカッコいいロゴ作ってほしい。そうすると、各団体のピッチ資料等にも入れられる。そして、#インパクト志向をみんなでやっぺいこうよ！ムーブメントを起していくことで、力強くなる。  
→言葉についてはWGでも議論したいと思う。ぜひこの場にいる方は署名していただきたい。
- 企業側の意見も聞いてみたい。  
→あくまでも志向原則で言葉は広く捉えることができるし、実際かなり自分たちの目指したいものとの親和性が高い。できる範囲でやっぺいこうという部分では企業だから、という意味での違和感はない

#### 全体会合後、多くの意見をいただき、以下の通り変更。

- ・定義を「社会的インパクト志向で事業や活動を実施するための基本的なきまり」  
→「社会的インパクト志向で事業や活動を実施するための基本方針」に変更
- ・「署名」を「賛同表明」に変更
- ・賛同表明の単位を法人としてから部署単位もOKに変更

#### 4. 名称変更とインパクトマネジメントフレームワーク、ガイドライン説明と意見交換 (CSO ネットワーク 今田氏より)

ガイドラインWGが2017年度に行ってきたことと概要に加え、社会的インパクトマネジメントの概念について説明。本日の会合をもって、社会的インパクト志向原則は完成したものと考える。SIMIが設立してから社会的インパクトの評価だけではなく、インパクトマネジメントやImpact Maximization というよう概念にシフトしてきており、社会的インパクトマネジメントを中心におき、それを実践していくための評価として社会的インパクト評価を捉えなおそうということで、本フレームワークを提示する。7月下旬くらいまでに社会的インパクトマネジメントのVer.1ガイドラインを出していきたい。そして、SIMIをSocial Impact Measurement InitiativeからSocial Impact Management Initiativeへ改名していきたいと考える。

#### 質疑・意見：

- フレームワークとしてマネジメントと評価のサイクルがわかりやすくよかった。専門家ではなく、事業者が初見で見たときに、もっと具体性のあるガイドラインがあるといい。事例やそのプロセス、ストーリーなどに沿って何をすればいいのかなどの道筋がわかると良いのではないか。
- インパクト評価の目的は改善。資金提供者からみると、適切どころに資金を配分する

ということも、インパクトマネジメントの言葉の定義の中に入ってくるのか？

→おそらく Yes。WGにも様々な立場の人が参加しており、議論になっている。特に社会的インパクト評価について考えると、誰が何のために使うかというところまで立ち返ればよいのではないかと考えていて、立場によって目的のとり方が変わってくるので、それを超えて一義的にまとめるのは難しい。

→そうであれば、定義に加えて、「資金提供者が最適な資金配分をするような・・・」など主語を変えた文言が付け加えられるといいのではないかと思う。

- ロードマップ⑤に 1,000 団体の 80 パーセントが使いこなせるようになる」とあるが、現実的にはちょっと厳しいのではないかと感じる。ストーリーをつけるなど、工夫をお願いしたい。

→目標値が高い感があるが、社会的インパクト志向をまず様々なステークホルダーにもっていただき、そこから広げて行きたい。そのような中で 80%目標は再検討する必要かと思う。

- インパクトマネジメントサイクルに移していくのは賛成。インパクト評価というのが、現場でまだまだ浸透していない、もしくは上から目線のように見られることも多い。なので、評価ではなく、マネジメントという文脈の中で語るというのは、前向きでいいと思う。その上で提案があり、**Social Value International** がスタンダードを作っていて、グローバルスタンダードにはここに入っていない 2 つのポイントがある。ひとつは、マルチステークホルダーの分析。目標設定をしたときに、最初にしなければならないのは、計画ではなく、ネガティブ・ポジティブのステークホルダー認識であるということ。評価は往々にして上から目線で捉えられることがあり、この概念は大事。ゆえに注釈ではなく、コアに入れるべき。また、グローバルスタンダードにはデータを検証するプロセスが入っている。データをちゃんと検証し、妥当性があるかを入れてもいいのでは。また、現場の方に届く言葉・表現をした上でアウトプットしてほしい。

→言葉や概念の力点の置き方は、ガイドライン作成の上でも参照したいと思う。

- 今は社会的インパクト評価をしているということで、加盟をしている。ただ、これが社会的インパクトマネジメントになると、今自分たちがサイクルとしてまわしているといえる自信がない。個人としてはマネジメントに移行することはよいと思うが、インパクト評価を大事に投資先を選んでいるときはわかりやすかったが、社会的インパクトマネジメントをしている団体として投資を決定するのは難しいのではないかと、という実感がある。たとえば、社会的インパクト評価とマネジメントを分けて一覧を出してみてもどうか、と提案。

→すぐに出来ているかどうかを問うというよりも、これから変化を一緒に経験してもらうことは必要なのではないかと、思う。

- 社会的インパクトマネジメントの教育機会の提供、組織の **transition** がスムーズに行くようお願いしたい。参加団体が署名をしたうえで、インパクトマネジメントへ移行

するようなデザインなど、現場が混乱しないように対応してほしい。

**全体会合後、多くの意見をいただき、以下の通り変更。**

- (1) Social Impact Day (SID) においては、「名称変更の発表」はしない。
- (2) SID 以降、皆様に向けた名称変更に関する説明の機会をしっかりと設ける。
- (3) 名称変更の場合は、関係団体の皆様の継続意向確認・手続きに関する「移行期間」を設ける。

**5. Social Impact Day 2018 について**

日本財団藤田氏より、Social Impact Day 2018 の概要について説明。

以上